

生活機能賦活研究部

(1) 構成員

部長 大川 弥生

室長

自立能力開発研究室 大川 弥生

運動機能賦活研究室 朴 眩泰

流動研究員

李 相侖

特任研究員

工藤 美奈子

原田 和弘

客員研究員

木村 伸也

朴 相甲

研究生

関口 春美

中村 茂美

佐藤 浩二

森 淳一

内藤 寿子

研究補助員・事務補助員

竹内 富久恵

服部 典子

中澤 香澄

砂田 典子

(2) 平成 24 年度研究活動の概要

生活機能賦活研究部は、高齢者の生活機能向上に係る医療技術に関する調査・研究を行うことを目的としている。

自立能力開発研究室では、災害時の生活機能低下の同時多発に着目し、新潟県中越地震（2004 年）以来各種災害で実態把握と現地活動を行ってきた。昨年（2011 年）3 月発生 of 東日本大震

災では、被災者の生活機能の実態把握と、生活機能低下予防・改善を中心とした現地支援活動を、自治体と協力して現在も継続している。加えて、本年度 7 月に九州北部豪雨が発生し、そのような異なる災害種別に対しても実態把握と支援活動を行っている。

以上と、これまでの各種災害（地震、豪雨、高波等）での研究成果とを比較検討しつつ、災害時の支援のあり方と、そこから明らかとなった平常時の支援のあり方についての課題を明らかにした。その成果は随時施策、支援活動および啓発に生かしている。

それらに基づいて、高齢者に関する災害時対策として下記を提唱した：① これまでの「要援護者対策」に代る「特別な配慮を要する人」の概念と定義（健康状態と生活機能の両側面からとらえ、予防をも重視する）、② 「防げていた死亡：preventable death」だけでなく、「防げていた生活機能低下：preventable disability」の概念。

これら両者を重視する必要性について検証し、その重要性が確認された。

運動機能賦活研究室では、① 認知機能低下に関わる至適身体活動パターンの解明、② 軽度認知機能障害（mild cognitive impairment, MCI）の高齢者における認知機能向上プログラムの開発と効果の検証、および、③ 自立した生活を持続するための身体活動特性解明及び環境要因との関連性に関する検討を行っている。

自立能力開発研究室：大川弥生、工藤美奈子、中村茂美、関口春美 災害時の生活機能低下予防に関する研究

東日本大震災（2011年3月）と九州北部豪雨（2012年7月）を踏まえ、被災者の生活機能の実態把握と、生活機能低下予防を中心とした現地支援活動から、災害時の支援のあり方の検討と、そこから平常時の支援のあり方を考えることに重点をおいた。

1. 東日本大震災発生後の生活機能低下の継続的実態把握

昨年度（発災7月後）にICFに基づく生活機能調査を実施した宮城県南三陸町で、発災1年7月後に、40歳以上全町民（内：高齢者4,035名：回収率97.4%）で同様の調査を実施した。高齢者につき、以下の結果が得られた。

- 1) 震災後に「活動」の低下が認められ、発災後1年7月後にもその改善が認められない人が多数あり、むしろ発災7月後よりも増加していた。すなわち7ヵ月時点以後の1年間に新たな低下者が発生していた（例：歩行困難非回復は、非要介護認定高齢者3,681名の29.2%。発災7月後には23.9%）。
- 2) 生活機能低下は要介護認定者だけでなく、非要介護認定者にも多かった。
- 3) 高齢者では若年者よりも低下者が多かった。
- 4) 居宅生活者においても、仮設住宅生活者よりは若干低い、低下が認められ、差は発災7月後よりも縮まった。
- 5) 「活動」低下の主な原因は生活不活発病であり、その最も多い原因は「外ですること」がなくなったこと

（「参加」の低下）であり、発災7月後と同様であった。

6) 上記は岩手県大槌町でもほぼ同様の状況であり、これは同種類の生活機能低下が広範囲に発生している危険性を示唆するものである。

2. 九州北部豪雨での生活機能低下の実態

大分県日田市・玖珠町の浸水地区を対象に発災2～4週及び4ヵ月後に生活機能調査を行い、生活不活発病による活動低下の多発が確認された。

3. 災害時支援のあり方

高齢者に関する災害時対応においては、これまでの研究成果をもとに提唱してきた、①従来の「要援護者対策」ととどまらず、「特別な配慮を要する人」としてとらえる必要性、②その際、補完的支援のみでなく「防げたはずの生活機能低下（preventable disability）」の“予防”が、発災後中期においては発災早期以上に重要であることが確認された。またこれが、災害種別を異にする九州北部豪雨においても妥当することが確認できた。

4. 啓発

生活不活発病についての認識が不十分なまま今回の震災を迎えたため、その啓発（予防・改善のプログラムを含めて）が緊急の課題であった。

そこで調査研究成果を活用し、自治体等とともに、被災地住民向けおよび各種専門職向けの研修会等を行い、またメディアを通じて広く啓発した。

運動機能賦活研究室：研究員氏名 朴眩泰

運動機能賦活研究室・高齢者の認知機能と日常身体活動パターン 解明に関する ICT システム開発に関する研究

サクセスフル・エイジングと健康づくりのために、高齢者が継続的に実行できる最適な日常生活活動パターンを解明し、社会参加のあり方を探索することを目的とした研究を実施している。具体的には、① 認知機能低下に関わる至適身体活動パターンの解明、② 軽度認知機能障害（mild cognitive impairment, MCI）の高齢者における認知機能向上プログラムの開発と効果の検証、および、③ 自立した生活を持続するための身体活動特性解明及び環境要因との関連性に関する検討を行っている。

これらの検討を行うために、平成 24 年度は、愛知県大府市に在住する 65 歳以上の全住民の約 5000 人を対象とした調査結果（認知機能、身体活動、および身体機能に関する評価など）の分析を行った。具体的には、様々なモバイル装置を用いた認知・身体機能評価システム、歩行解析システム、および脳血流解析システムの開発を行った。これらにより、MCI を有する高齢者や虚弱高齢者に関する判定基準の確立に寄与する知見が得られた。

また、現在、加速度センサ付き体動計や全地球測位システム（global positioning system, GPS）、および地理情報システム（geographic information system, GIS）によって客観的に評価されたデータと、調査票

により主観的に評価された身体活動の場面・目的や社会活動等のデータを統合する身体活動計測システムの開発を進めている。並行して、身体活動計測システムにより評価された日常生活パターンと老年性症候群との関連性の探索や、データベース構築を行っている。

平成 25 年度および 26 年度は、縦断的調査を行い、これまで得られた知見の強化を目指した研究を行う。また、現在開発を進めている 3 つのシステムを統合し、3 つのシステムから得られた総合的結果に基づいて最適化された生活活動の改善内容を提案する「生活活動改善システム」を開発する。そして、生活活動改善システムが、実際介護予防の現場でも効果的なシステムかどうかや、地域の特性によらず多地域で展開可能なシステムかどうかを検証する予定である。

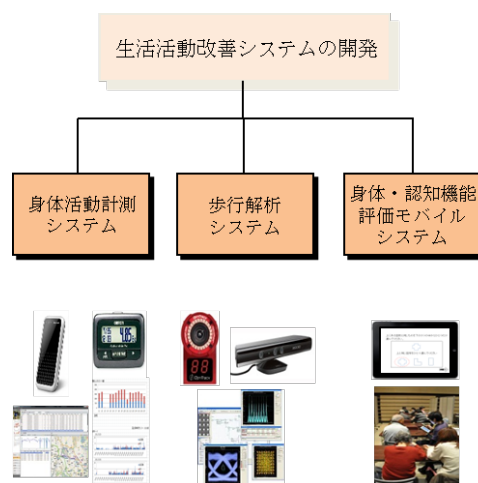


図 システム開発の全体像

研究業績（生活機能賦活研究部）

I. 論文発表

1. 原著

Shimada H, Suzuki T, Suzukawa M, Makizako H, Doi T, Yoshida D, Tsutsumimoto K, Anan Y, Uemura K, Ito T, Lee S, Park H:

Performance-based assessments and demand for personal care in older Japanese people: a cross-sectional study.

BMJ open. 2013;3(4).

Makizako H, Doi T, Shimada H, Park H, Uemura K, Yoshida D, Tsutsumimoto K, Anan Y, Suzuki:

Relationship between going outdoors daily and activation of the prefrontal cortex during verbal fluency tasks (VFTs) among older adults: a near-infrared spectroscopy study.

Arch Gerontol Geriatri. 2013 Jan-Feb;56(1):118-23.

Makizako H, Shimada H, Park H, Doi T, Yoshida D, Uemura K, Tsutsumimoto K, Suzuki T:

Evaluation of multidimensional neurocognitive function using a tablet personal computer: Test-retest reliability and validity in community-dwelling older adults.

Geriatr. Gerontol. Int. 2012 Dec 12. PubMed PMID: 23230988.

Park JH, Miyashita M, Kwon YC, Park HT, Kim EH, Park JK, Park KB, Yoon SR, Chung JW, Nakamura Y, Park SK:

A 12-week after-school physical activity programme improves endothelial cell function in overweight and obese children: a randomised controlled study.

BMC pediatrics. 2012;12:111.

Suzuki T, Shimada H, Makizako H, Doi T, Yoshida D, Tsutsumimoto K, Anan Y, Uemura K, Lee S, Park H:

Effects of multicomponent exercise on cognitive function in older adults with amnesic mild cognitive impairment: a randomized controlled trial.

BMC neurology. 2012;12:128.

吉田裕人，西真理子，渡辺直紀，藤原佳典，深谷太郎，小川貴志子，金美芝，李相侖，新開省二：

FI-J(Frailty Index for Japanese elderly)を用いた「虚弱」の予知因子に関する研究.

日本老年医学会雑誌, 49(4), 442-448, 2012.

竹内瑠美，村山陽，安永正史，野中久美子，倉岡正高，大場宏美，鈴木宏幸，西真理子，小宇佐陽子，李相侖，藤原佳典(2012)：

児童のストレスに世代間交流授業がもたらす効果－高齢者ボランティア“りぷりん” 特別プログラムより.

日本世代間交流学雑誌, 2(1),49-56, 2012.

小宇佐陽子，清水由美子，李相侖，西真理子，藤原佳典，新開省二：

地域の保健・福祉の向上を目指した住民ボランティア育成への取り組み：埼玉県件鳩山町におけるこれまでの歩みと今後の課題.

日本公衆衛生雑誌, 59(3), 161-170, 2012.

2. 総説

大川弥生：

生活不活発病；災害時医療の新たな課題である「防げたはずの生活機能低下」.
内科, 110 (6)：1020－1025, 2012.

大川弥生：

生活不活発病の予防と回復支援；「防げたはずの生活機能低下」の中心課題.
日本内科学会誌, 102(2)：471-477, 2013.

大川弥生：

災害時の新しい課題としての「防げたはずの生活機能低下」.
教育と医学, 60(7)：607－615, 2012.

大川弥生：

災害時に多発する生活機能低下に注意；生活不活発病への対応の重要性.
仙台市医師会報, 574：19－23, 2012.

大川弥生：

災害時の新しい課題としての「防げたはずの生活機能低下」(2)；支援のあり方を I C F から考える.

教育と医学, 60(8)：696－705, 2012.

大川弥生：

災害時に多発する生活機能低下に注意(2)；生活不活発病予防・改善の方策.

仙台市医師会報, 575：14－19, 2012.

大川弥生：

「健康」と「環境」のとらえかた；「相互作用・統合モデル」としての I C F（国際生活機能分類）の視点の重要性.

保健師ジャーナル, 68(8)：667－676, 2012.

大川弥生：

災害時の新しい課題としての「防げたはずの生活機能低下」(3)；「特別な配慮が必要な人」という見方の重要性.

教育と医学, 60(9)：800－809, 2012.

大川弥生：

災害時における介護福祉士の役割；「防げたはずの生活機能低下」の予防・改善の担い手として.

おはよう 21, 23(7)：76－77, 2012.

大川弥生：

災害時に介護福祉士ができること.

おはよう 21, 23(7)：78－81, 2012.

大川弥生：

災害時支援の新たな課題：防げたはずの生活機能低下；生活機能低下の同時多発.

みんなのねがい, 553：44, 2012.

大川弥生：

災害時支援の新たな課題：防げたはずの生活機能低下；生活不活発病.

みんなのねがい, 554：44, 2012.

大川弥生：

災害時支援の新たな課題：防げたはずの生活機能低下；生活不活発発病の予防・改善。

みんなのねがい， 556：44， 2013.

大川弥生：

災害時支援の新たな課題：防げたはずの生活機能低下；特別な配慮が必要な人。

みんなのねがい， 557：44， 2013.

大川弥生：

災害時の生活不活発発病：予防・改善のターゲットとして。

ふれあいケア， 19(3)：29-33， 2013.

大川弥生：

総合リハビリテーションの視点から災害を考える；東日本大震災での実態把握に基づいて。

リハビリテーション研究， 154(4)：6-9， 2013.

3. 著書、Chapters

大川弥生：高齢者ケアの基本理念。介護支援専門員基本テキスト；第3巻高齢者保健医療・福祉の基礎知識

介護支援専門員テキスト編集委員会編集，長寿社会開発センター，p272－298，2012.

大川弥生：WHO－F I C（WHO国際分類ファミリー）と I C F（国際生活機能分類）。

診療情報管理Ⅳ 専門・国際疾病分類法編 第6版，武田隆久総監修，日本病院会，p303－335，2012.

大川弥生：新しい課題・「防げたはずの生活機能低下」；被災者本人の知恵と能力を生かす環境づくり。 3. 1 1と私 東日本大震災で考えたこと，藤原書店，p226－229，2012.

4. その他

5. 新聞・報道等

大川弥生：

朝日新聞、平成24年6月13日朝刊、親族宅に避難した高齢者 ほぼ半数「歩くのが困難」

大川弥生：

読売新聞、平成24年6月21日朝刊、震災後足腰衰え深刻化 高齢患者の2割歩行困難 仙台で調査

大川弥生：

毎日新聞、平成24年6月23日夕刊、お年寄り歩行困難 親族宅＞仮設

大川弥生：

河北新報、平成24年6月25日朝刊、歩行能力半数低下のまま 生活不活発病注意を

大川弥生：

産経新聞、平成24年6月25日、生活不活発病？震災10ヵ月後も回復せず

大川弥生：

中国新聞、平成24年6月25日、震災後、新たに歩行困難に 仙台の高齢者2割

大川弥生：

京都新聞、平成24年6月25日、仙台、高齢者2割歩行困難 震災10ヵ月後も回復せず

大川弥生：

福井新聞、平成24年6月25日、仙台、高齢者2割歩行困難

大川弥生：

日本農業新聞、平成24年6月26日、「みなし仮設」に多い歩行困難 親族宅も深刻

大川弥生：

佐賀新聞、平成24年6月26日、震災10ヵ月後で2割強歩行困難 仙台市が高齢者調査

大川弥生：

河北新報、平成24年7月3日夕刊、河北抄

大川弥生：

日本農業新聞、平成 24 年 7 月 25 日、農が支えるシニア暮らし；体動かして生活に意欲

大川弥生：

日本経済新聞、平成 24 年 9 月 13 日、高齢者の「不活発病」防げ；生きがい見つけ健康に

大川弥生：

朝日新聞、平成 24 年 9 月 22 日朝刊、被災した障害者、歩くことが困難に

大川弥生：

朝日新聞、平成 24 年 9 月 23 日朝刊、患者を生きる：リハビリ；上を向いて歩く

大川弥生：

中国新聞、平成 24 年 9 月 29 日、「人生」を創る支援のあり方を考える－真のリハビリテーションとは：参加促すサポート大切

大川弥生：

読売新聞、平成 24 年 10 月 31 日、被災地で問題 生活不活発病；活動の機会奪われ支援を

大川弥生：

朝日新聞、平成 25 年 1 月 12 日朝刊、高齢者 2 割生活機能低下 九州豪雨の被災者

大川弥生：

読売新聞、平成 25 年 2 月 2 日、元気な高齢者の 3 割が生活不活発病？…南三陸町

大川弥生：

新しい課題・「防げたはずの生活機能低下」．
環，49：74－76，2012．

6. 特許申請、取得状況

発明者：鈴木隆雄、島田裕之、朴眩泰、牧迫飛雄馬

発明の名称：軽度認知機能障害の有無の診断システム、認知機能検査用端末及び認知機能検査用プログラム

出願年月日：平成 24 年 7 月 2 日

出願番号：特願 2012-148680

出願人：独立行政法人国立長寿医療研究センター

II. 学会・研究会等発表

1. シンポジウム・特別講演

大川弥生：

体・心・社会を支える医療の枠組みとしての I C F.

第 41 回日本脊椎脊髄病学会，2012 年 4 月 20 日，久留米.

Park H.

Older adults, chronic disease and habitual physical activity,

International Symposium: Oral Health for Elderly Disability, April 21, 2012, Korea.

Park H.

Physical activity and musculoskeletal health in older adults, “Active Life”

The 7th International Sport Science Symposium, September 17, 2012, Tokyo.

大川弥生、工藤美奈子：

災害時支援の新課題としての「防げたはずの生活機能低下」；生活機能デザインのためのニーズ把握として.

第 30 回日本ロボット学会学術講演会，2012 年 9 月 19 日，札幌.

大川弥生：

生活機能デザイン学確立のためのストラテジ；ICF：人の「生活機能」を捉えるための「共通言語」.

第 30 回日本ロボット学会学術講演会，2012 年 9 月 19 日，札幌.

大川弥生：

総合リハビリテーションの視点から災害を考える；東日本大震災での実態把

握に基づいて.

第 35 回総合リハビリテーション研究大会, 2012 年 9 月 21 日, 横浜.

大川弥生 :

“preventable death”に加えて“preventable disability”を : 「特別な配慮が必要な人」の重要性.

第 18 回日本集団災害医学会総会, 2013 年 1 月 17 日, 神戸.

2. 国際学会発表

Park J, Miyashita M, Nakamura Y, Park H, Kwon Y, Kim E, Park J, Park K, Park S:

School exercise increases endothelial progenitor cells in overweight and obese children.

American College of Sports Medicine 59th Annual Meeting, San Francisco, May 30, 2012, USA.

Park H, Kwon Y, Kim E, Park J, Park S.

Habitual physical activity is associated with cognitive function and the risk factors for hip fracture in older adults.

American College of Sports Medicine 59th Annual Meeting, San Francisco, May 30, 2012, USA.

Shimada H, Suzuki T, Makizako H, Doi T, Yoshida D, Tsutsumimoto K, Anan Y, Uemura K, Park H.

Effects of multicomponent exercise on cognitive function in the older adults with Amnesic Mild Cognitive Impairment: A Randomized Control Trial.

Alzheimer's Association International Conference 2012, Vancouver, July 15, 2012, Canada.

Park H, Shimada H, Makizako H, Doi T, Yoshida D, Tsutsumimoto K, Anan Y, Uemura K, Suzuki T.

Effects of multicomponent exercise on cerebral hemoglobin oxygenation in older adults with amnesic mild cognitive impairment: functional monitoring using NIR spectroscopy.

Alzheimer's Association International Conference 2012 Canada, July 16, 2012, Vancouver.

Okawa Y, Ueda S, Kudo M, Oikawa E, Kasamatsu J, Tani N, Sato J, Takahashi S :

ICF-based Large-Scale Population Surveys seven Months after the Great Earthquake and Tsunami in one of the most severely hit towns.

WHO-FIC Network Annual Meeting 2012, 19 October, Brasilia, Brazil.

Okawa Y, Ueda S, Kudo M, Oikawa E, Kasamatsu J, Tani N, Fujiyama H :

How should be the Preventive and Supportive Programs at the Time of Disasters: The Official Recognition of the ICF-based Programs founded on the Experiences of many Disasters in Japan since 2004.

WHO-FIC Network Annual Meeting 2012, 19 October, Brasilia, Brazil.

Okawa Y, Ueda S, Kudo M, Oikawa E, Kasamatsu J, Tani N :

The Importance of the Distinction of 'Universal Independence' and 'Limited Independence' in the Qualifiers of Activity: Its Influence on the Decline of Functioning after the Disaster.

WHO-FIC Network Annual Meeting 2012, 19 October, Brasilia, Brazil.

Okawa Y, Ueda S, Kudo M, Oikawa E, Kasamatsu J, Tani N, Sato J, Takahashi S :

The Occurrence of Functioning Problems in Persons with Disabilities following Disaster.

WHO-FIC Network Annual Meeting 2012, 19 October, Brasilia, Brazil.

Komatsu T, Togo H, Park H, Mitani T, Midorikawa T.

Properties of relationships between in physical, cognitive function and reaction time in institutional residents.

The Gerontological Society of America 65th Annual Scientific Meeting 2012, San Diego, November 17, 2012, USA.

3. 国内学会発表

島田裕之, 牧迫飛雄馬, 土井剛彦, 吉田大輔, 提本広大, 上村一貴, 阿南祐也, 大矢敏久, 朴眩泰, 鈴木隆雄.

軽度認知機能障害を有する高齢者における認知機能向上の規定因子.

第 47 回日本理学療法学会大会, 2012 年 5 月 25 日, 神戸.

土井剛彦，牧迫飛雄馬，島田裕之，吉田大輔，堤本広大，上村一貴，澤龍一，朴眩泰，阿南祐也，大矢敏久，鈴木隆雄。

軽度認知障害高齢者に対する複合的運動プログラムは歩行能力を改善できるのか？—ランダム化比較試験による検証—。

第 47 回日本理学療法学術大会，2012 年 5 月 26 日，神戸。

上村一貴，島田裕之，牧迫飛雄馬，土井剛彦，吉田大輔，堤本広大，朴眩泰，阿南祐也，大矢敏久，内山靖。

軽度認知障害を有する高齢者に対する運動介入による Timed Up & Go Test の向上には認知機能が影響する。

第 47 回日本理学療法学術大会，2012 年 5 月 27 日，神戸。

牧迫飛雄馬，島田裕之，土井剛彦，吉田大輔，堤本広大，上村一貴，阿南祐也，大矢敏久，朴眩泰，鈴木隆雄。高齢者における外出頻度は文字流暢性課題中の脳血流動態に影響するか？

第 47 回日本理学療法学術大会，2012 年 5 月 27 日，神戸。

朴眩泰，島田裕之，土井剛彦，牧迫飛雄馬，吉田大輔，堤本広大，上村一貴，阿南祐也，大矢敏久，鈴木隆雄。

軽度認知障害高齢者に対する多面的運動介入が脳活動に与える影響：近赤外分光法による脳活性の計測。

第 47 回日本理学療法学術大会，2012 年 5 月 27 日，神戸。

阿南祐也，島田裕之，朴眩泰，牧迫飛雄馬，土井剛彦，吉田大輔，堤本広大，上村一貴，大矢敏久，鈴木隆雄。

軽度認知障害を有する高齢者における身体活動と運動機能および認知機能の関係。

第 47 回日本理学療法学術大会，2012 年 5 月 27 日，神戸。

朴眩泰，島田裕之，牧迫飛雄馬，土井剛彦，吉田大輔，堤本広大，上村一貴，阿南祐也，鈴木隆雄。

多面的運動介入が軽度認知症高齢者の脳活動に及ぼす影響。

第 54 回日本老年医学会学術集会，2012 年 6 月 29 日，東京。

島田裕之，鈴川芽久美，鈴木隆雄，牧迫飛雄馬，吉田大輔，土井剛彦，堤本広大，阿南祐也，上村一貴，朴眩泰。

要支援・要介護認定と身体機能.

第 54 回日本老年医学会学術集会, 2012 年 6 月 28 日, 東京.

牧迫飛雄馬, 島田裕之, 吉田大輔, 土井剛彦, 堤本広大, 阿南祐也, 上村一貴, 朴眩泰, 鈴木隆雄.

地域高齢者における転倒と運動機能との関連－認知機能の影響－.

第 54 回日本老年医学会学術集会, 2012 年 6 月 28 日, 東京.

工藤美奈子, 高橋晶子, 佐藤祥代, 関口春美, 大川弥生 :

災害時における高齢者の生活機能(5) : 東日本大震災での生活機能調査.

第54回日本老年医学会学術集会、2012年6月30日、東京.

佐藤祥代, 高橋晶子, 工藤美奈子, 大川弥生 :

災害時における高齢者の生活機能(6) : 避難所における生活不活発発病の把握.

第54回日本老年医学会学術集会、2012年6月30日、東京.

牧迫飛雄馬, 島田裕之, 土井剛彦, 朴眩泰, 吉田大輔, 堤本広大, 上村一貴, 阿南祐也, 李相侖, 伊藤忠, 鈴木隆雄.

軽度認知障害を有する高齢者の運動機能低下および脳萎縮と将来の転倒発生との関連.

第 9 回転倒予防医学研究会研究集会, 2012 年 10 月 7 日, 東京.

天野秀紀, 吉田裕人, 西真理子, 藤原佳典, 深谷太郎, 村山洋史, 渡辺直紀, 李相侖, 新開省二, 土屋 由美子.

高齢期記憶機能低下の予後と危険因子.

第 71 回日本公衆衛生学会総会(Page379). 2012 年 10 月 24-26 日, 山口.

佐久間尚子, 藤原佳典, 呉田陽一, 安永正史, 鈴木宏幸, 大場宏美, 西真理子, 李相侖, 小宇佐 陽子, 石井賢二, 内田勇人, 新開省二.

質問紙調査からみた高齢者の認知機能 世代間交流プログラム REPRINTS-2.

第 71 回日本公衆衛生学会総会(Page306). 2012 年 10 月 24-26 日, 山口.

村山陽, 藤原佳典, 大場宏美, 西真理子, 李相侖, 小宇佐陽子, 安永正史, 野中久美子, 佐久間尚子, 深谷太郎, 吉田裕人, 内田勇人, 新開省二.

世代間交流の視点から見た交流効果の検討 世代間交流プログラム REPRINTS-1.

第 71 回日本公衆衛生学会総会 (Page306). 2012 年 10 月 24-26 日, 山口.

新開省二, 渡辺直紀, 吉田裕人, 西真理子, 村山洋史, 天野秀紀, 藤原佳典, 深谷太郎, 小川貴志子, 金美芝, 李相侖.

虚弱指標の開発 『介護予防チェックリスト』の虚弱指標としての妥当性の検証.

第 71 回日本公衆衛生学会総会(Page306). 2012 年 10 月 24-26 日, 山口.

工藤美奈子、関口春美、大川弥生 :

災害時生活機能低下予防対策に関する研究 (3) : 東日本大震災での生活機能調査.

第 18 回日本集団災害医学会総会、2013 年 1 月 17 日、神戸.

大川弥生 :

生活不活発病多発の実態把握に立って今後の対策のあり方を考える : 「防げたはずの生活機能低下」予防の最大の要点として.

第 18 回日本集団災害医学会総会、2013 年 1 月 17 日、神戸.

4. その他、セミナー等

大川弥生 :

生活不活発病予防について.

生活不活発病予防研修会, 2012 年 5 月 23 日, 東松島.

大川弥生 :

「よくする介護」とは.

富山県平成 24 年度「よくする介護」研修 (介護福祉士会研修会), 2012 年 6 月 16 日, 富山.

大川弥生 :

高齢者の知恵と能力を生かそう ; 生活不活発病を防ぐ.

仙台市医師会一般市民向け災害関連講演会, 2012 年 6 月 23 日, 仙台.

大川弥生 :

災害時医療の新たな課題 : 防げたはずの生活機能低下 ; 「生活不活発病」の予防・改善を中心に.

宮城県医師会医師研修講習会, 2012 年 7 月 7 日, 岩沼市.

大川弥生：

災害時の新たな課題；防げたはずの生活機能低下（preventable disability）.
河合塾文化講演会，2012 年 7 月 14 日，大阪.

大川弥生：

I C F の基礎的理解.

文部科学省介護福祉等に係る講習会，2012 年 8 月 24 日，名古屋.

大川弥生：

「よくする介護」の考え方と進め方の基本.

富山県平成 24 年度「よくする介護」研修（介護福祉士会研修会），2012 年 9 月 1 日，富山.

大川弥生：

「人生」を創る支援のあり方を考える；真のリハビリテーションとは.

広島国際大学シンポジウム：支援技術が支える高齢者・障害者の当たり前の生活・社会参加，2012 年 9 月 8 日，広島.

大川弥生：

実践講座；支援機器の利用者と開発者.

広島国際大学シンポジウム：支援技術が支える高齢者・障害者の当たり前の生活・社会参加，2012 年 9 月 8 日，広島.

大川弥生：

生活不活発病を防ごう.

第 41 回宮婦連健康と医療を考える中央集会，2012 年 9 月 12 日，仙台.

大川弥生：

総合リハビリテーションに活かす I C F .

日本障害者リハビリテーション協会 I C F 研修会，2012 年 9 月 22 日，横浜.

大川弥生：

災害後の新たな課題としての「防げたはずの生活機能低下予防」.

宮城県介護予防研修会，2012 年 10 月 5 日，仙台.

大川弥生：

「よくする介護」のアセスメント.

富山県平成 24 年度「よくする介護」研修（介護福祉士研修会），2012 年 10 月 20 日，富山.

大川弥生：

災害後の生活不活発病予防；いきいきとした人生をともに築くために.

日田市公開講座，2012 年 10 月 10 日，日田.

大川弥生：

生活機能向上をめざす栄養マネジメントの中での I C F.

全国福祉栄養士研修会，2012 年 12 月 2 日，東京.

大川弥生：

障害当事者における I C F の活用；具体的分析（活用）事例を通じて.

平成 24 年度内閣府障害者週間連続セミナー，2012 年 12 月 7 日，東京.

大川弥生：

災害時支援の新たな課題；「防げたはずの生活機能低下」予防.

平成 24 年度内閣府障害者週間連続セミナー，2012 年 12 月 7 日，東京.

大川弥生：

I C F の基本と医療面への活用.

第 3 回厚生労働省 I C F シンポジウム，2012 年 12 月 13 日，東京.

大川弥生：

生活機能分類の活用に向けて.

第 3 回厚生労働省 I C F シンポジウム，2012 年 12 月 13 日，東京.

大川弥生：

生活不活発病を防ごう；災害時・平常時の健康づくりのために.

愛知県医師会医療安全に関する講演会，2012 年 12 月 19 日，名古屋.

大川弥生

生活不活発病予防支援，岩手県介護予防研修会，2013 年 1 月 21 日，盛岡.

大川弥生：

目標指向的アプローチ.

富山県平成 24 年度「よくする介護」研修（介護福祉士研修会），2013 年 1 月 26 日，富山.

大川弥生：

生活不活発病予防について.

平成 24 年度介護福祉士災害支援活動に関する研修会，2013 年 2 月 16 日，東京.

大川弥生：

生活不活発病予防を知っていますか.

大河原町第 3 回元気！安心！フェア，2013 年 2 月 27 日，大河原町.

大川弥生：

生活不活発病の予防・改善；介護予防の基本に立って.

介護予防研修会，2013 年 3 月 11 日，東松島.

Ⅲ. 公的研究費

1. 厚生労働省

大川弥生，（代表）998 万円（総額 998 万円）

障害者対策総合研究事業

高齢の障害者への支援の在り方に関する研究

大川弥生，（分担）研究代表者一括計上（総額 10,000 万円）

地域医療基盤開発推進研究事業

被災地の再生を考慮した在宅医療の構築に関する研究

朴眩泰，（分担）代表者一括

長寿科学総合研究事業，

介護予防プログラム開発に関する研究.

朴眩泰，（分担）代表者一括

長寿科学総合研究事業，

先進的自立支援機器を用いた介護予防の効果検証.

2. 文部科学省

朴眩泰, (代表) 600 万円 (総額 1,200 万円)

基盤研究(B),

認知機能低下抑制を実現する身体活動パターンの解明.

朴眩泰 (代表) 150 万円 (総額 300 万円)

挑戦的萌芽研究,

高齢者の自立健常に向けた身体活動特性解明及び住環境再生モデルの提案.

朴眩泰 (分担) 代表者一括

JST 競争的研究資金; コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン,

認知症予防のためのコミュニティの創出と効果検証.

3. 財団、その他

朴眩泰 (分担) 代表者一括

住環境研究所,

高齢者世帯の温熱環境と活動量に関する研究.